

現地理解教育における音楽科の可能性

— タイ現地素材を用いた音楽実践を通して —

前バンコク日本人学校 教諭

東京音楽大学 教育助手 姜 亜 未

キーワード：現地理解，音楽科，タイ王国，伝統楽器，ラナートエーク

1. はじめに

筆者は、海外子女教育財団から毎年世界各国に派遣される専任教員として2007年4月から2010年3月までの3年間タイ・バンコクに赴任した。赴任先であるバンコク日本人学校は、バンコク中心部から車で30分程の土地に位置する。1年を通して非常に暑い気候が続くが、2500名を超える児童生徒は広いグラウンドで元気に遊び、充実した施設の中、毎日意欲的に学んでいる。日本各地から派遣される教員は100名を超え、現地スタッフとともに日々の教育活動に従事している。また、音楽科には6名の専科教員が配置されており、全ての学年で専科教員による専門性を生かしたきめ細やかな音楽指導が行われている。

本校の50年以上の長い歴史を振り返ると、古くから現地校との交流学习会や総合的な学習の時間、社会科等を中心として、これまで様々な場面において現地理解教育が推進されてきた。中でも音楽的活動は、言葉の壁がある子どもたちにとってより有効な自己表現活動となり得るため、現地校との交流活動等において歌や楽器を通じた活動が小学部を中心に以前より取り入れられてきた。また、中学部では2年次の修学旅行において、スコタイ芸術学校を訪れ、実際にタイの楽器を現地の生徒とともに体験するという貴重なプログラムがここ数年続いている。しかし、資料を見る限り音楽科の枠としてタイの土地に根ざす音楽やそれに関連する分野を学習する機会がこれまで確立されていなかった。そこで、更に充実した音楽科から迫る現地理解教育を目指し、中学部においてタイ古典音楽や楽器の理解及びを体験・学習できるよう現地の素材を生かした教材作りを試みた。

2. タイ音楽と実践事例

(1) タイ音楽と楽器について

タイには伝統楽器が多数存在し、1000年以上も前からほとんど形を変えずに現在まで受け継がれているといわれている。その種類は弦楽器から笛、太鼓、木琴類まで多岐に渡る。また、ラオス、カンボジア、ミャンマー、マレーシアと隣接しているという土地柄、音楽においても互いに影響を受け合いその要素が入り混じっている。西洋音楽で用いられる12音音階とは異なり、1オクターブを7音に分けるその独特な音階も東南アジア地域で共通する概念と捉えることができる。西洋音楽に耳慣れている現代の日本人の感覚からは微妙なずれを感じることが多いが、子どもたちがタイ及び東南アジア地域の音楽を正しく理解する上でもこの独特な音階は重要な鍵となる。

(2) 楽器選び

子どもたちとの集団授業に適している楽器は何かと考え、以下の2つの楽器に絞り、最終的には②のラナートエークを選択した。

① キム

在タイ日本人の間では、ホテルのロビーやレストラン等で度々目にするもののあるキム（もともとは中国から伝わった陽琴の一種）が広く愛好されている。日本語で学ぶことのできる教室もあり、響きのある音色が大変美しい。しかし、演奏前に



必ず調弦が必要であり（通常弦は42本）、演奏を始めるまでに時間がかかる。また、正式な古典音楽におけるアンサンブルには使用されないため、少人数での授業等に適していると考え、今回は除外した。

②ラナートエーク

この楽器は、木琴類に属し調弦の必要がなく鍵盤も通常22と少ない。簡単に音が出せるだけでなく、タイの音階の並びを西洋楽器と比較しながら、視覚的・聴覚的に理解することができる。また、旋律・伴奏ともにアレンジ次第で奏でられるため、アンサンブルによる演奏の楽しさを味わうことができる。2種類のマレットで音の違いについても比較して考えることができるため、授業で用いるには最適であった。



(3) 実践事例

まずは少人数からの実践を始め、2008年度には中学部2年の選択音楽科の授業履修者10名を対象に授業を行い、2009年度には対象を拡大して中学部1年の全学級（7学級）においてラナートエークを用いた実践を行った。

アンサンブルには、タイの伝統的な行事・ロイクラトン（灯籠流し）の際に現在も街のあちこちで聴くことができる民謡『ロイクラトン』を用いた。小学部では毎年10月～11月のこの行事の時期に合わせて音楽朝会等でこの曲を歌うため、親しみを感じる生徒が多い。旋律とオスティナートをを用いた伴奏をラナートエークが担当し、そこにチン（手の平に収まる程の円形のシンバルで、古典音楽ではアンサンブルをリードする楽器。）を組み合わせるリズムを取り、3人1組のグループアンサンブルをした。

○単元名 「タイの楽器に親しもう ～ラナートエーク・アンサンブル～」

<単元の指導計画>

配時	主な活動内容とねらい	●主な教材 ○留意点
1	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞：タイの伝統音楽と舞踊 ラナートエークの構造と音の配列を知る。 オクターブで音階練習を行う。 バチの正しい持ち方を習得する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●映像『RUM THAI』THAI CLASSICAL DANCE ●ラナートエークの代表的奏者である Khun In のCDを用いて実際の演奏を鑑賞する。 ●CD『ロイクラトン』
2	<ul style="list-style-type: none"> 『ロイクラトン』の最初のフレーズを演奏する。 細かく音をならしていく。 オスティナートで伴奏をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●『ロイクラトン』 ○バチの持ち方が正しいか確認していく。 ○鍵盤の中心部分をたたくことでより響きのある音色を奏でられるよう促す。
3	<ul style="list-style-type: none"> 『ロイクラトン』の旋律を覚え、最後まで演奏出来るようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●『ロイクラトン』 ○旋律を口ずさみながら演奏していくよう指導する。
4	<ul style="list-style-type: none"> チンのリズムを覚える。 『ロイクラトン』をラナートエークで通して演奏できるようにする。 3～4名のアンサンブルを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●『ロイクラトン』 ○チンの持ち方とリズムを個別に指導する。 ○間違えても止まらずに続けていくよう声かけをする。
5	<ul style="list-style-type: none"> タイ楽器を用いて仲間と共に演奏する喜びを味わう。 楽器の特性を理解し、より美しい音を求めて演奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●『ロイクラトン』 ○自分の音、仲間の音に耳を傾け、より美しい音色を求めて演奏するよう指導する。

(4) 授業を終えて

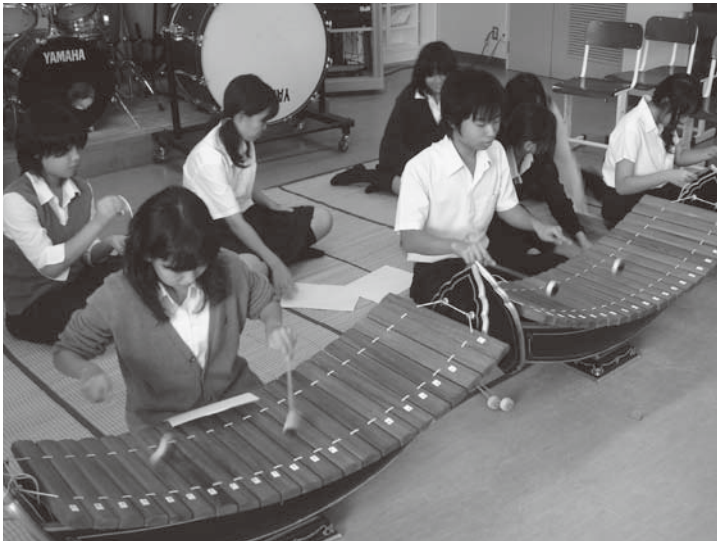
「あっ!この音、どっかで聴いたことある!!」そんな生徒の反応から授業はスタートした。普段目にする機会の多い楽器でも、名前を知らないという生徒がほとんどであった。今回、授業を通して触れたタイの伝統的な楽器・ラナートエークは、その音色を奏でるだけでもなんとも言えないタイ独特の音楽観を感じ取ることが出来る。これらの伝統的な楽器はタイの人々の生活や宗教と密接な関係を持ち、長い間受け継がれてきているため、実際に演奏してみることで、地図や歴史から紐解くタイとは一味違う現地の人々の中に潜むリズム感や躍動感が感じられるのではないだろうか。また、そんなところに音楽から迫る現地理解の更なる可能性が秘められているのではないかと考える。以下は中学部2年での実践を終えての生徒の感想の一部である。

- 今まではただの木琴だと思っていたけれど、全然違って驚きました!よく聴いていた音がラナートの音だということが分かって良かったです。他のタイの楽器もやってみたいです。
- 空間に優しく響くような音だなあ・・・と思いました。パチの種類があることや、パチの持ち方、たたき方・・・初めてのことはかりでとても面白かったです。全部覚えられたので、うれしかったし、とにかく楽しくできました。ちがう曲も今度ひいてみたいです。
- タイ楽器の主力みたいなもので、演奏できてよかったです。ぼくは、修学旅行のタイ楽器をラナートにしたので、そこでも上手く演奏出来るといいです。
- 同じ鍵盤をたたくのが難しかったです。始めはたたくとき押しつけながらたたいていたけど、最後は、軽くたたけてよかったです。
- 初めてやった楽器で、始めは簡単そうだなあって思っていたけど、実際はすごく難しく、でも、できると、めっちゃ楽しかったです。日本では演奏できないと思うので、いい記念になったと思います。
- タイの街中でよく聴く音だったので、今回できてとてもよかったです。同じ音を一緒に弾くところが始めはとても難しく、なかなかできなかったです。修学旅行の交流会の楽器もこれなので、今回はいい練習になってよかったです。
- ラナートは、木琴みたいな楽器でした。普通の木琴より鍵盤の数が少なくて簡単だと思っていましたが、実際やってみると難しかったです。チンって楽器も簡単そうでしたが、リズムをとるのが難しかったです。
- 難しいなと思いました。ピアノとほとんど一緒かなと思っていたら全然違っていたので、慣れるまで時間がかかりました。他の楽器もぜひやってみたいと思います。修学旅行が楽しみです。

「学校の音楽の時間」というと、多くの生徒がベートーベンやバッハ、合唱曲にリコーダー・・・というイメージを抱くのではないだろうか。ここ数年、音楽教育の流れの変化に伴い、日本の伝統的な芸能や音楽に触れる取り組みや実践が増えてきたものの、まだまだその数は圧倒的に西洋音楽の方が多い。

ここ数年実践されていなかったといえるタイの楽器に取り組んだことは大変意義深く、生徒のタイ音楽の世界への興味関心を高めることができたと思う。高度な技能の習得までは至らなかったが、自分が生活する地域の音楽や芸能に触れることは、その土地に愛着を抱き、より親しみをもっていくことにつながる。これは、どこに住んでも変わらないものではないだろうか。生徒の多くはタイを離れる時が来るが、いつかこの音を聴くことがあったら、タイという国、そして人々の暖かさを思い返すことができるだろうと考える。

3. おわりに



[授業でラナートエークに取り組む生徒]

本校に約25年前、教科備品として購入したタイの楽器は古くなり、実際に演奏することが難しくなっていたため、まずは楽器を購入して備品を整えることからスタートした。材質や価格の選定等、言葉が思うように通じない中ではあったが、バンコクならではの実践として子どもたちとタイ音楽の扉を叩き、実践することができた。個々の滞在年数はそれぞれであるが、異文化の中で成長していく子どもたちにとって自己のアイデンティティ確立していく学齢期には、本国理解とともに滞在国理解（現地理解）が不可欠である。特に経済面や文化面が大きく異なる東南アジア諸国に滞在する上で、日々の生活の中で目にしたり耳にしたりする事象を自ら考え理解し、吸収しようとする姿勢を身に付けていくことは、将来アジアを担う一員となり、国際社会で活躍していく上でいつか必ず役に立つはずである。

現在、タイ音楽について日本語で専門的に書かれた書籍や、初心者が演奏するための方法論等はほとんど見られない。したがって、より質の高い音楽実践をしていくにあたっては、教師自身が基礎技能を身につけることが不可欠である。現地の音楽家から直接指導を受けることで、実際の音楽教授法や演奏方法を知ることができ、それを子どもたちに自信を持って実践することができた。また、現地でしか知り得ない情報の宝庫である在外教育施設において新たな教材を開発し、日本に発信していくことは、これからの国内での学校教育の発展を確実に後押ししていくものとなると実感している。

最後に、学生時代にいつか自分自身が海外の日本人学校で働く機会があったら、現地の素材を取り入れた音楽の授業をしてみたいという夢があった。実際にバンコクという地で様々な実践にチャレンジすることができた背景には、たくさんの方々のサポートがあった。この場をお借りして感謝の意を表すとともに、これからここで得た様々な経験を国内の教育実践に役立てていきたい。